

旗は男

稲見一良



男は旗

稲見一良

新潮社

おとこ はた
男 は 旗

著 者——稲見一良

© Itsura Inami 1994,
Printed in Japan



発 行——1994年2月15日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

電 話——営業部 03-3266-5111

編集部 03-3266-5411

振 替——東京4-808

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-392902-2 C0093

価格はカバーに表示してあります。

■男は旗■目次

■前篇■プレス・ギャングの巻 5

■後篇■宝島の巻 151

● 装帧·装画
宇野亜喜良

男
は
旗

海賊の末裔

安楽博忠に

前篇

プレス・ギャングの巻

一の章 風 太

海を隠し、町を覆っていた霧が、ゆっくりと消えていく。しつとりと水を含んだ微粒子が、前の日のあらゆる汚れを吸いとって去っていった。沖の彼方から朝の日の光が四方八方に拡がって、見る間に明かるくなった。

眼下にいつもの静かな海が現れ、長く美しいシリウス号の船体が見えてきた。朝はいつもそうなのだが、船は陸の方に少し傾いている。

ミカン山の斜面の木の切株に尻を据えて、朝霧の中から浮かび出た白い船を、身じろぎもせず見詰めていた安楽^{あんらく}さんは、「うーむ」と一つ呻^{うな}いた。安楽さんのなめし革を張ったような頬が緩み、唇がほころぶ。何と美しい船だ……という讃嘆の念が、今また安楽さんの胸を一杯にしているのだ。

安楽さんは船を見ながら、背中のベルトに挟んだ黄色い金属の筒を取り出した。長さ二十センチ、直径五センチほどの真鍮^{しんちゅう}の筒だ。一方の端を摘んで引き抜くように筒を伸ばし、目に当てた。遠眼鏡^{スバイクルース}だ。安楽さんの愛用の道具の一つで、十九世紀英国海軍の官給品に手を加えた特製のものである。

安楽さんはその隻眼鏡^{モノキョウ}で、船体を舐^なめるように見ていった。船首の長く突き出したバウスプリットの先端から、後尾スポーテッキの旗竿^{ハタシ}まで子細に眺めていく。もう何百回もそうしてきた。よくも飽きないものだ、と俺は思う。春夏秋冬、四季折々の海と、海に浮かんで動かない船を、安楽さんはこうして山の中腹から眺めてきた。

船は八方に張った太い鉄の鎖^{くさり}で繋留^{けいりゅう}されていて、浮いてはいるが二度と動くことはない。だが、流れるような線の、ほっそりとした優美なその姿や、少し後に傾いた二本の檣^{マスト}や煙突も、まるで波を切って海を進んでいるように見える。少なくとも、今にも動き出して港を出て行きそうに見えるのだ。

安楽さんは隻眼鏡^{モノキョウ}を覗^{のぞ}いたまま、片手を後にのばした。たわなに実をつけた木をまざぐり、ミカンを一つ搦^{にぎ}んでもぎ取った。片手ではわわっと皮を剥^むき、むっちりとした張ったミカンを一箇、丸ごと頬^ほばった。新鮮な早生^{わせ}ミカンのジュースがほとばしり、強い香りと酸味が口中に拡がったのだらう、安楽さんはまた呻^{うな}いた。

安楽さんは遠眼鏡の視野を、船と陸をつなぐ浮棧橋^{ポンツーン}と、全長百メートルのブロムナードを経て、眼下の町に移した。白々明けの海沿いの道路は走る車もなく、人影一つない。町はまだ眠っているのだ。

安楽さんの隻眼鏡は、ゆっくりと手前の方にチルトダウンし、また横にパンしていった。町とこのミカン山との中間の台地にあるバンガロー村に視線を移したようだ。外見だけはロッジ風の、薄

つべらの建物が数十軒集まってひしめきあった所がある。夏から秋のシーズンには若者たちで賑わう、お手軽のレジャー施設である。静かな海と、なだらかな緑の山に囲まれた、風も人も穏やかな温暖のこの地にも、近頃はこういうケバケバしい場所が増えていた。

今朝はそのバンガローの周りに、色とりどりのオートバイが駐めてあるのが見えた。三、四十台はあるだろう。安楽さんの顔が引き締まり、苦い物を噛んだように口がへの字になった。バイクの群れは、昨夜ひとしきり町を走り廻って騒音を撒き散らした暴走族のものだろう。バンガロー村は、シーズンを終えて休業したはずだから、彼らは戸締りを破って不法侵入したのだろう。ごろ寝の眠りを貪^{むさど}っているのか、バンガロー村は静かだった。

その時、ほの暗い林道に動くものがあつた。俺の目は、安楽さんの自慢の望遠鏡より遠目が利く。遠い小さなもの、特に動くものを目敏く捕えることが出来るのだ。

見ると、新聞配達人の坊主のスクーターだ。朝夕町中を走り廻って新聞を配っている、中学生くらいの少年だ。シリウス号へもこの子が運んで来るのだ。俺は、スクーターがエンジンをとめたまま惰力で走っていることにすぐ気づいた。いつもはマフラーからキリキリ舞いする青白い排気煙を吹いているのだが、今は50ccのエンジンを切って、下り坂を滑走しているようだった。

スクーターの前部のバスケットにも、後の荷台にも新聞はない。すでに配り終えたのだろう。とすると、町に帰るにしては方向が逆だ。安楽さんの遠眼鏡もスクーターを追っていた。新聞少年は確か痩せっぽのはずなのに、今朝はなんだか大きく膨^{ふくら}んで見える。えらく着ぶくれているようだ。

山は清々しい朝の冷気に包まれてはいるが、寒いというにはまだほど遠い。

ピンクの屋根のバンガローの前で、スクーターがくるつと向きを変えて停まった。スクーターを下りた坊主が、すすつと軒下に走った。ここからはいずれにしろ下の物音は聞こえないが、坊主のスニーカーの足は音もなく敏捷で、まさに忍び寄る秋風のようなだ。

オフロードの派手なツートンカラーの一台に近づくなり、坊主はしゃがみこんだ。いつの間にか工具のような物を持ってエンジンにとりつき、その手を休みなく動かしている。手順を心得た、無駄のない動きに見えた。

何事だろう、と見守るうちに、坊主は大きな物体をかかえて、よろよろと立ち上がった。何と、エンジンをバイクの本体から外してしまったのだ。数分の早技だった。坊主は金属の塊を抱いて、よたよたと歩きだした。

坊主はスクーターに辿り着くなり、後の荷台に荷物を載せた。軽い車体の前輪が撥ね上がった。自転車タイヤチューブラーらしい黒いベルトで、荷物を素早く両たすきにかけて縛りつけた。バンガローを何度もふり返りながらも、坊主の動きにはためらいがなかった。派手で居丈高なスタイルだったバイクは、ぽつかりと空隙ができ、いかにも間の抜けた姿になっていた。

不意にバンガローの窓が開いて、ぬつと男が現れた。下着に手を突っこんで体を掻きながら、歯医者に行った河馬のような大口を開けて欠伸をした。坊主がスクーターにとび乗って走りだした。あわてて逃げる坊主を、男は寝呆けた目でぼんやり見送っていたが、はっと気づいて、窓の下を見

た。男が部屋の内側に向かって大声をあげたのが、ここまで聞こえた。

坊主のスクーターは右に左に首を振りながら、上り坂をふらふらと進んで行く。アクセルを目一杯ふかしている。青い排気ガスをもうもうと吐き、悲鳴をあげ、もどかしいほどの鈍さで逃げていく。荷の重量に振りまわされて、今にも路肩からとび出しそうだ。

バンガローのあちこちから、男がとび出してきて、急に騒がしくなった。男たちはバイクに走り寄る。あの連中に追われたら、坊主は忽ちのうちに捕まるだろう。

安楽さんは、すつくと立ち上がった。スパイグラスをパチッと叩き込み、ベルトの脇に差しながら、もう走っていた。山道に駐めてあった青いピックアップ・トラックにひらりととび乗り、ハンドブレーキを外した。4WDのいかにも堅牢そうな車体が、下り坂を滑りだした。

安楽さんはクラッチを踏み、チェンジ・バーをローに叩き込みながらエンジンをかけた。両の手でハンドルを握み、クラッチを離すと同時にアクセルペダルを踏み込んだ。ピックアップは土砂を撥ね上げてとび出した。

安楽さんは下り坂を飛ばし、ぐいとハンドルを切ってミカン畑の中の小径に乗り入れた。近道だ。ピックアップは緑濃いミカンの葉を擦って走った。俺は安楽さんの黒いセーターの肩にしがみついていた。と言っても別に怯えていたわけではない。安楽さんのドライビングの腕は一級だし、それにこの辺りは彼の裏庭のようなもので、どんな小径にも通じていた。

車は広い道に躍り出た。五十メートルほど前を、新聞少年のスクーターが必死に逃げて行く。と

見る間に、大きく進路を外し、路肩の草むらに突っ込み転倒した。斜面に投げ出された坊主は、懸命に這い上がって来て、倒れたスクーターを起こそうとした。分不相応の重量物を積まれたスクーターは、不貞くされて尻を草に埋め、前輪を撥ね上げたまま起きそうもなかった。

安楽さんはスクーターの横で急停車し、ドアを開け放したままとび下りた。坊主は体をこわばらせて安楽さんを見上げた。丸い眼鏡を鼻の頭にずり落としたとぼけた顔に、恐怖が貼りついている。突然躍り出てきた、やけに肩の広い蔵^{くら}つゐものがゴリラのように見えたのかも知れない。

安楽さんは、チラッと振り向いた。追って来る十数台のバイクが遠くに見えた。冷えたエンジンを点火させるのに手間どったのだろう。

安楽さんは倒れたスクーターに近寄り、チューブの帯を引き剥がして、坊主が盗んだエンジンを軽々と持ち上げた。ピックアップのテールゲートの上から、板敷きの荷台へドスツと落とした。次にスクーターのハンドルと後輪を掴んで、目よりも高くさし挙げた。

坊主は目を丸くし、前歯の真ん中に隙間のある口をあぐりと開けて見上げていた。やはりこれはゴリラだ、それもキングコングだと思ったようだ。

安楽さんはスクーターも荷台に落とし、パンパンと手を払いながら坊主に言った。

「乗れ」

安楽さんは追手の方をちょっと振り返って、運転席にとび乗り、助手席のドアを開けてやった。

坊主はリスのように跳ね上がって、助手席に転げこんだ。

間髪を入れず、ビックアップはとび出した。二、三台のバイクが追いついてきた。口々に喚く罵声が聞こえた。振り返った坊主が、

「ア、ア、アパッチだ！」

と悲鳴のような声をあげた。じゃあ、こっちは駅馬車だ。

追いついて来た先頭の奴が怒鳴った。

「待てえ、待ちやがれー。停めろー」

駅馬車が、いやビックアップがタイヤを焼いて急停車し、次の瞬間とび出した。紙一重で追突を免れたバイクは、急ブレーキを踏んで後輪から滑って転倒した。

「停めろと言うから停まったんだ」

前を睨んだまま、安楽さんはつぶやいた。一台のバイクが左側へせり上がって来た。安楽さんは車を左へ寄せた。頑丈な車体がバイクのハンドルを擦った。バイクは路肩からとび出し、男が叫びながらダイビングした。

安楽さんはギアをセカンドに落とし、荒々しくハンドルを切って、直角に山側への傾斜に乗り入れた。四輪を駆動させて、狭い急な坂道をぐいぐい登って行った。追って来た連中は態勢をたて直し、一気に坂を駆け上がりとしたが、息切れさせて次々にバイクを倒した。地団太踏んでいる連中の姿が、バックミラーの中で小さくなっていった。

坊主が、ほっと大きな息を吐いた。ひと安心したのだろう。蒼ざめていた細い顔に、血の気が戻

りはじめていた。安楽さんは車を広い山道に出し、スピードを落とした。山の上へ向かう明かるい道をゆっくりと進みながら、安楽さんは初めて坊主に顔を向けた。

「危なかったぞ」

落ち着いた、いつもと同じ端厳な表情で、目だけを少し和ませていた。

坊主は安楽さんの方に向き直り、改まって「た、助かりました」と言い、ひよこっと頭を下げた。礼は心得てる奴だ。

「でも、どうして俺を……」と今度は畏怖の目で安楽さんを見つめた。

「なぜ俺を、助けてくれたんです？」

「うーむ」

安楽さんは呻いた。この人は、日々の事の半分は、呻いただけで済ませてしまう。

「いい根性してる」

安楽さんが言った。

「それに、鮮かな手並みだった」

ふん、珍しくお世辞言ったりして……俺は横目で安楽さんを睨んでやった。

その時、坊主が初めて俺に気づいて、とび上がった。

「な、なんだ、こいつは！」

やい坊主、こいつとは何だ。